

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03039

研究課題名（和文）フィンランドにおけるCLIL（内容言語統合型学習）とその成功要因に関する調査研究

研究課題名（英文）A research on CLIL (Content and Language Integrated Learning) in Finland with a special focus on factors for its success

研究代表者

伊東 治己 (ITO, Harumi)

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：90176355

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：CLIL実施校への訪問調査を通してフィンランドにおけるCLILの実態を把握した上で、その発展・拡大に貢献したと思われる成功要因を教育的、制度的、社会的観点から分析した。教育的要因としてはCLIL担当教員の高度な英語力と教育力、教育内容選定における自由裁量、教員を取り巻く労働環境を、制度的要因としては学校教育の正規の選択肢としての位置づけ、戦略的配置と校種間の連携、社会的要因としては英語の社会的ニーズの高まり、フィンランド社会の国際化を提示した。加えて、発展・拡大の背後にある課題としてCEILとEMIへの傾斜、英才教育への傾斜、平等性を重視する教育哲学との整合性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

実験的試みから出発して今日のような発展・拡大を見せたフィンランドのCLILの成功要因を明らかにしたことは、今後我が国においてCLIL、それも現在の我が国での主流をなす英語教育の中で実施される指導法としてのCLILだけでなく、CLIL本来の姿である通常教科を英語で指導するカリキュラムとしてのCLILの普及・推進を図る上で大きな学術的・社会的意義を有していると考えられる。加えて、カリキュラムとしてのCLILの普及・推進を図る上で指針と条件整備を明示した点と、フィンランドの場合とは反対に大学レベルから始めて徐々に高校、中学校、小学校へと拡大していくという提案は本研究の独創的な点であると言える。

研究成果の概要（英文）：By visiting Finnish schools offering CLIL, this study identified factors contributing to the success of CLIL from three different perspectives; educational, institutional and social. As educational factors, three factors were identified, (1) teachers' high-level English proficiency and pedagogical skills, (2) teachers' discretion in selecting instructional contents, and (3) good working environment surrounding teachers. As institutional factors, two factors identified, (1) CLIL as a legitimate alternative of school education and (2) strategic deployment of CLIL and linkage between different levels of schooling. As social factors, two factors identified, (1) increase of social needs for English and (2) globalization of the Finnish society. The study also identified three issues behind the success; (1) inclination toward English CLIL and English-medium instruction, (2) inclination toward gifted education and (3) conformity with educational philosophy which emphasizes equity.

研究分野：英語教育学

キーワード：CLIL 内容言語統合型学習 フィンランド 成功要因 教育的要因 制度的要因 社会的要因 課題

1. 研究開始当初の背景

現在、我が国を含め、世界の多くの国で CLIL (Content and Language Integrated Learning) が注目されている。日本語では「内容言語統合型学習」と訳されている場合が多いが、1990 年代半ばにヨーロッパで生まれた新しい教育的試みである (Marsh, Maljers, & Hartiala, 2001)。細やかな実験的試みから出発し、EU (欧州連合) の支援を受けて、着実に発展・拡大していった。その過程で、CLIL の解釈も多岐にわたるようになり、現在では世界的な規模で、かつ様々な形態で実践が繰り返されている (Cenoz, Genesee, & Gorter, 2014)。Gabillon (2020) は、様々な形態で実践されている CLIL を大きくバイリンガル教育の中に位置づけ、内容への力点の置き方の違いに応じて「強形」から「弱形」に至る連続体 (continuum) として捉えて、以下の図 1 のような分類図 (翻訳は筆者、一部改編) を提示している。

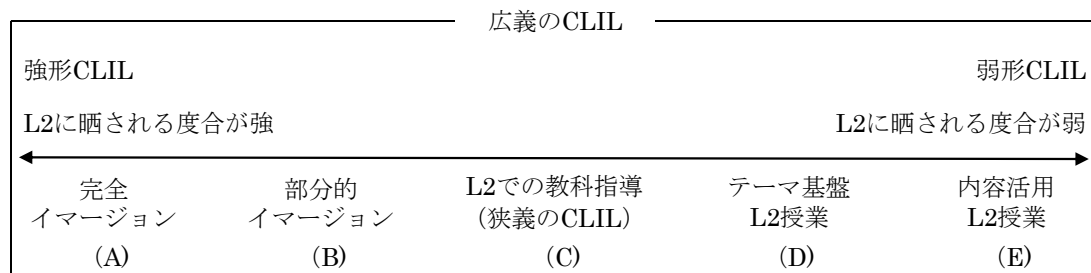


図 1 : Gabillon (2020) による CLIL 分類図 (一部改編)

我が国にも導入され、現在、研究面でも実践面でも積極的な取り組みがなされている (例えば渡部・池田・和泉, 2011)。ただ、我が国での CLIL は、現在のところ、通常教科の内容を外国語で学習する試みというよりは、従来の外国語 (英語) 教育の枠組みの中でこれまで以上に内容を重視した教育的試みとして展開されている傾向が強いようである。ある意味では外国語 (英語) の CLIL 的指導と言えなくもない。決して外国語の CLIL 的指導の意義を否定する訳ではないが、内容重視の外国語指導法として推進していくと、本来 CLIL に秘められているポテンシャルが必ずしも十分に活かされない可能性がある。そこで、CLIL の出発点に立ち返り、CLIL のもとの姿、CLIL が目指したこと、CLIL で可能になると考えられたこと等を再確認する必要を感じ、そうすることで、日本での CLIL の在り方を吟味し、将来に向けての方向性を提案したいと考えた。この目的を実現するための方法として、本研究では、CLIL 発祥の地ヨーロッパの中でも CLIL 先進国の 1 つとされるフィンランドにおける CLIL に着目した。現地調査をまじえて、その発展と拡大に寄与した要因を明らかにするとともに、発展と拡大に伴って生まれてきた課題についても理解を深め、ひいては日本における CLIL のさらなる発展にむけた指針を提案したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は次の 3 点である。

- ① CLIL 先進国の 1 つであるフィンランドにおける CLIL に注目し、その発展・拡大に貢献してきた要因を特定する。
- ② CLIL の発展・拡大の中で新しく出てきた今日的課題を明らかにする。
- ③ 日本において CLIL とどう向き合っていけばよいのか、その方向性を検討する。

3. 研究の方法

上記 3 つの研究目的を達成するために、以下のような研究方法を採用した。

- ① これまで発表された CLIL に関する論文や著書になるべく多く当たり、CLIL の定義、CLIL 誕生の背景、CLIL の特質等について理解を深める。
- ② フィンランドで CLIL プログラムを開設している学校を訪問し、実際にどのような形で CLIL が展開されているのか、クラス編成、入学条件、カリキュラム、教科書・教材、指導者、指導法、評価に焦点を当てながら、授業観察と従業員担当者への聞き取り調査を実施する。
- ③ フィンランドの大学で CLIL に関する研究を行っている研究者に対する聞き取り調査を実施する。
- ④ CLIL に関する文献調査と CLIL 実施校への訪問調査、CLIL 実施校で入手した各種資料、及び CLIL 研究者の聞き取り調査の結果を踏まえて、研究成果報告書を作成し、研究の総括を行う。

4. 研究成果

自身はフィンランドの外国語教育の研究を進める前はカナダのイマージョン教育について研究していた(伊東, 1997)。その研究の中でカナダのイマージョン教育の成功要因を分析した(Ito, 2005)。その際、その成功要因を、教育的、制度的、社会的という3つの要因に分けて分析した。今回の研究においても、研究の継続性と研究結果の比較可能性の観点から同じ枠組みを使って、その成功要因を分析することにした。CLILに関する文献調査、フィンランドでCLILプログラムを開設している学校への現地調査、CLIL担当者とCLIL研究者への聞き取り調査の結果を踏まえて、次のような成功要因を抽出した。

(1) CLILの発展・拡大を支えた成功要因

1) 教育的要因

- ①CLIL担当教員の高度な英語力と教育力
- ②教育内容選定における自由裁量
- ③教員を取り巻く良好な労働環境

表1：OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018 (国立教育政策研究所)

国名	仕事時間	指導(授業)	事務業務	課外活動指導
日本	56.0	18.0	5.6	7.5
フィンランド	33.3	20.7	1.1	1.0
参加国平均	38.3	20.3	2.7	1.9

備考：1週間当たりの時間数 参加国は48ヶ国

2) 制度的要因

- ①学校教育の正規の選択肢としての位置づけ
- ②戦略的配置と校種間の連携

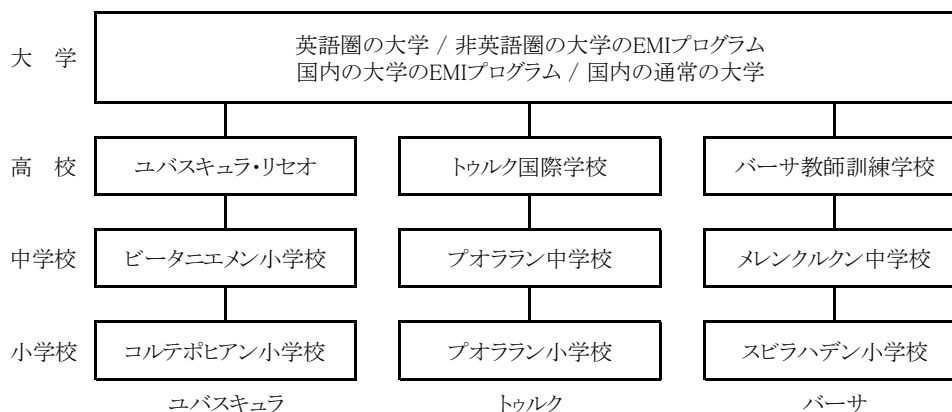


図2：フィンランドにおけるCLILの校種間連携

3) 社会的要因

- ①英語の社会的ニーズの高まり
- ②フィンランド社会の国際化

(2) フィンランドにおけるCLILの今日的課題

フィンランドにおいてCLILが細やかな実験的試みから出発し、フィンランド国内で拡大・発展していった経緯の背後にある成功要因を、教育的・制度的・社会的要因に分けて明らかにしてきたが、その発展・拡大の中で当初想定されていなかったと思われる課題も表面化しつつある。その今日的課題とは以下の3点である。

- ①CEIL(Content English Integrated Learning)とEMI(English-Medium Instruction)への傾斜
- ②英才教育への傾斜
- ③平等性を重視する教育哲学との整合性

(3) 日本におけるCLILの現状と今後の方向性

1) 現状

- ①外国語教育の枠内でのCLILが主流
- ②内容を扱えばCLILとみなす風潮
- ③キャッチコピーとしてのCLIL

- 2) CLIL 推進ガイドライン（英語 CLIL を前提として）
- ①カリキュラムとしての CLIL と指導法としての CLIL を区別
 - ②カリキュラムとしての CLIL（上記図 1 の狭義 CLIL）の推進に力を
 - ③公立学校での教育の選択肢の 1 つとして
- 3) CLIL の発展にむけての条件整備
フィンランドの CLIL の成功要因を参考にしながら、いくつかの条件整備が必要となる。ここでは、その条件整備の中で日本でのカリキュラムとしての CLIL の発展にとって特に重要と思われるものを提示する。
- ①CLIL 担当教員の育成
 - ②CLIL 用の教科書の準備
 - ③校種間の接続
- 4) 具体的提案：大学レベルからの開始
カリキュラムとしての CLIL を推進していくためのガイドラインと条件整備について考察してきたが、本節ではカリキュラムとしての CLIL を我が国においても本格的に推進していくための方略を提示する。具体的には、フィンランドのように小学校段階から大学段階へと積み上げるのではなく、大学レベルから開始し、徐々に高等学校、中学校、小学校へと広げていくのが妥当であり、現実的であると考えている。その理由として、以下の 4 つを提示する。
- ①第 1 の理由：校種間の接続を考慮する必要がない
 - ②第 2 の理由：学習指導要領に縛られない
 - ③第 3 の理由：教員の確保が比較的容易
 - ④第 4 の理由：受験勉強へのプレッシャーがない
- 5) 大学レベルでの英語 CLIL の類型案

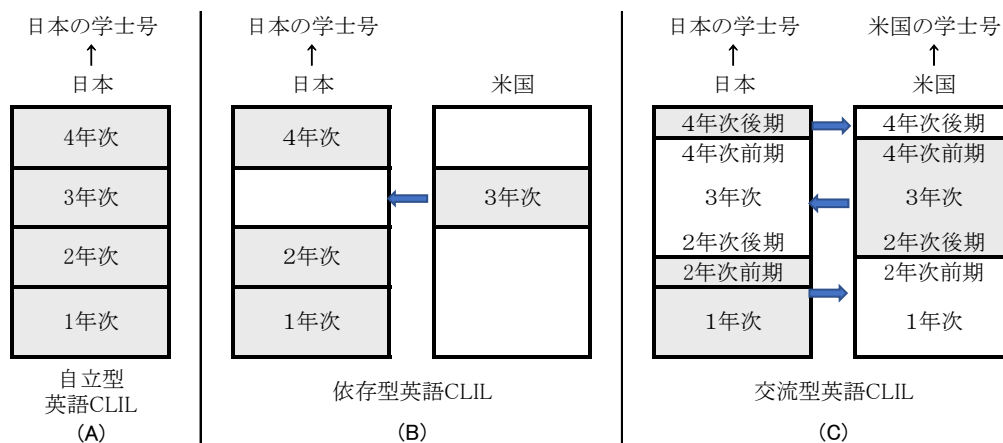


図 3：日本の大学における英語 CLIL の 3 つの類型

(A) の自立型英語 CLIL が理想像ではあるが、人的資源をはじめとして大学を取り巻く教育環境を考えると、現状では (B) の依存型英語 CLIL が当面の候補となるであろう。現在でも多くの大学で海外留学制度が実施されているが、ある程度の教授陣をそろえて強化・発展させていけば、日本型の英語 CLIL が着実に展開できそうである。今後の推移を見守りたい。

(4) 総括

魅力的な新しい指導法が提示されると、往々にして Bandwagon effect (バスに乗り遅れるな) という現象が生じる。日本における今の CLIL を取り巻く現状を考えると、その傾向が伺える。なるほど CLIL は魅力的な教育的試みではあるが、導入に当たっては、その費用対効果を的確に見極め、いきなり理想に走ることなく現実的な対応が求められる。特に、同じ CLIL でもカリキュラムとしての CLIL は、指導法としての CLIL と違って、一旦始めるとすぐには撤回できない。仮に実験的試みとして開始するにしても、その発展性（上級学年・校種への接続）を担保する必要がある。今後、CLIL が日本の学校教育にどのようにして根づいていくのか、それとも一時的な流行に終わるのか、注視していきたい。

筆者自身は、外国語としての英語教育の歴史を、①「英語について学ぶ」(Learning about English) 時代、②「英語そのものを学ぶ」(Learning English) 時代、③「英語を通して学ぶ」

(Learning through English) 時代の 3 段階に分けて考えている。①英語について学ぶ時代は、いわゆる文法訳読式教授法が外国語教育の主流をなしていた時代である。文法説明や文法問題、英語からの翻訳、英語への翻訳を通して、英語に関する知識の獲得が重視された。その当時の英語でのコミュニケーション・モードが、たとえ時間がかかっても書籍や新聞など印刷物を通して正確な情報を入手することであったので、文法や母語への翻訳が重視されたのも今から考えれば一理ある。

②英語そのものを学ぶ時代は、英語でのコミュニケーション・モードが印刷物からラジオやテレビに取って代わられた結果、英語について学ぶ活動だけでは英語コミュニケーション能力の育成はままならぬという反省に立って、英語そのものをしっかり学ぶことが重視された時代である。

③英語を通して学ぶ時代は、英語を単に母語を異にする人々の間でのコミュニケーションの手段として学習するだけでなく、英語が学習の手段となる時代である。思い返せば、我が国においても英語が学習の手段となっていた時代があった。明治期の文明開化や富国強兵の下、当時設立されたばかりの大学で行われた教育である。日本語で書かれたテキストもなく、専門分野を指導できる日本人教師も存在しない環境で、英米で出版されたテキストを使い、海外から招聘された外国人教師による英語での教育が実施されていた。その当時、英語はまさに「学習の手段」であった。ただ、その学習の対象が一部のエリート層に限定されていた。

平成・令和の時代になって、CLIL という形で英語を学習の手段とする教育法が再び脚光を浴びてきた。明治期のエリート教育とは違って、今度はすべての児童・生徒を対象とした普通教育の中での関心の高まりである。その意味で、CLIL は③の英語を通して学ぶ時代の到来を新しい形で我々に示してくれていると言える。我が国における CLIL の発展を祈願して、本報告書のまとめとしたい。

<引用文献>

- Cenoz, J., Genesee, F., & Gorter, D. (2014). Critical analysis of CLIL: Taking stock and looking forward. *Applied Linguistics*, 35 (3), 243-262.
- Gabillon, Z. (2020). Revisiting CLIL: Background, pedagogy, and theoretical underpinnings. *Contextes et Didactiques*, 2020 (15). Available at <https://journals.openedition.org/ced/1836?lang=en>
- Ito, H. (2005). *A study of immersion education in Canada: Focusing on factors for its success*. Ph.D. dissertation, Hiroshima University.
- Marsh, D., Maljers, A., & Hartiala, A. (2001). *Profiling European CLIL classrooms*. University of Jyvaskyla.
- 伊東治己 (1997) 『カナダのバイリンガル教育—イマーション・プログラムと日本の英語教育の接点を求めて—』 溪水社.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011) 『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦第1巻 原理と方法』 上智大学出版.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 伊東治己	4. 巻 115
2. 論文標題 フィンランドにおけるCLILの発展・拡大の背景と課題ー発展・拡大に寄与した教育的・制度的・社会的要因に焦点をあててー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 研究論集（関西外国語大学）	6. 最初と最後の頁 119-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00008029	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊東治己	4. 巻 108
2. 論文標題 Examining potentials of CLIL (Content and Language Integrated Learning) for English language education in Japan.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『研究論集』（関西外国語大学）	6. 最初と最後の頁 203-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00007828	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊東治己	4. 巻 38
2. 論文標題 フィンランドにおけるCLIL (Content and Language Integrated Learning) に関する調査研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『四国英語教育学会紀要』	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32276/seles.38.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊東治己	4. 巻 117
2. 論文標題 日本におけるCLIL (Content and Language Integrated Learning) の現状と将来の方向性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『研究論集』（関西外国語大学）	6. 最初と最後の頁 337-355
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00008084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊東治己
2. 発表標題 CLIL and English Language Education in Japan
3. 学会等名 第50回中国地区英語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Diaz Perez, W., Ellison, M., Ito, H., Karkkainen, K., Lange, G., Lee, J., Mahan, K. R., Marsh, D., Osorio, P., Pavon Vazquez, V., & Schmidt, T.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 University of Guadalajara, Mexico	5. 総ページ数 28
3. 書名 Implementing internationalization of academia: Teaching learning research through English	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Teaching Learning Research through English https://www.youtube.com/watch?v=HaqcjCAWuK0

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------